912.3
ヨ

十一冊ノ内

小野寺蔵平

楊貴妃 入出ル 七文内ニ 脇一人 ハサラ髪 侍従 大口 腰帯 扇

次第 ヨワキ

わけ行へき東雲の道をしるへく
こゝ 川 付
迷ふらむ 是ハ唐玄宗皇帝ニ仕へ
奉る方士にて候 さても我君政を正
しく思召しませ中ニも文武を押下し
類なきよしかふ所ニ貴妃を取乃為
人を招給ふに深宮ふ今に楊貴妃

に定めし蜀の楊家の娘かゝるか故に玄宗
皇帝楊貴妃と号して寵愛ともにあま
て馬嵬か原にてうしなひ奉りて其
此歎き深くしせしめて乃方士に仰て魂魄
乃ありかを尋ねて蓬莱宮の勅定す
任せ上ハ碧落下ハ黄泉まて尋ね奉れ
と更にこんはくのありかをしらす候

未蓬莱宮に到らす此程に急き波濤に
わたり候はゝ常世の国とも尋ねはやと存候
ゆく幻もかな伝にても
玉のありか
ハそことしも波ちらてをきく行衛の
初乃ふみえし嶋山の草木のゆく
の枕ゆふとらえし雲井にかゝらく
急は程に是ハはや蓬莱宮に着て

二

れば身をすてゝ波路遥々とおもふやと
ひは あるし接ぶ不図の川にて逢
業なれば百宮殿盤々として
て更に急ぎ荘厳美麗にして
てさるかゝる七宝をちりばめ漢
言百里乃あそびは長生驪山乃
さ海も見えは更になそらふべかりけり

あらうれしの所や宮殿乃ごとく見えて
太真殿とかゝれたる額のかけゝるを
たゞちに徘徊しとれ彼ともに窺ゆ
とあれば（小面 唐織ツボヲル 大口 腰帯 扇）して あら物凄この文
中やあれ抱すこし文中磁石
昔驪山乃春の園に共に眺めし
花乃色うつれば変る習ひとて

蓬莱の秋乃洞に枕ならむる月
影も細く かゝる袂のおもわら立
し乃ぶやる いはぬ家の中に中
へことのは唐乃天子は勅乃使宮
送まて気はしれ玉妃はゝらぬ御
陰にして
まほか なぬ唐帝の使とはなすゝふ
送まて言さきゝ涙そえて九華の帳

をぎしの露て玉の簾をかゝせて
立出給ふ御姿をとられハ雲乃鬢ん
てゝ花の顔も姿 寂寞ゝ涙玉瞼
のちに落とうへさ給ひへハ梨花
一枝雨を帯くる粧の露をなれ
太液芙蓉は道かぬ未央乃柳の緑も
是よへいて海さ海へき宮やら文

乃揺燈の影迄も消えじとは恨の掛
ミ
く　勅定乃却りけるまつくに
や上ハ扱もさて色ある女世に渡りく
し時ハ我も能政をこそ行ひ經諭
かく世をのがれて後ハ唯ひとすじ乃
御縁も今ハ御命もあやうく見え
させ給ひて御難に世めくの御事に

御嘘のありかを見て来り逢ふの宮
を尋つまされすて君まつる御ためを思
かくさてまよひ唯思ふ御事の御心
かくさらば教えて八源御て思ふ
こうは候へ実に御ゆかしくとハかひ
あるまじの家の教にも有らぬ我の事
かくとゞかずに君が御情なは

ゆさまたとふふつゝきの深くのまゝまて
これく物かくゆく便乃風ハうら
先をも又と定乃意募の深四里を
さふ深をけれともさてしことまへきまゝ
別る孫ハ意つき倫らてそうらんまむ去
おかる深形見の抱きたひ路へして花
よあつまし形見よりて玉乃緒石

都て方古にあらひなれハいやさよ
花ハ世中ふたひまへき抱かれ候
てゝ候したまふへき濡男と君と人名れ
まも我つまあひし去の契わらハそれとも
おもしにゆきへしして
廿実て花ハ理有ら
さひそ出家我も又たゞ稲秋の七回秋
二年に契ひし去の契かと 同下 天ふ

あらはれ[illegible]是上陽の春の花となすとも
此あらは[illegible]は道理のみえてこそ
人と生れし身にひそかに結ぶ縁や
[illegible]
和歌の道を今も猶浅さ
まよひの世中乃くるしみ流転生死の習ひ
[illegible]
されば[illegible]魂は仙宮に
おもひつゝくも友とし[illegible]とか

たゝしき道理を[illegible]色[illegible]
されば[illegible]乃[illegible]ハ諸乃[illegible]世[illegible]
むかしと[illegible]人[illegible]ひて出
身の[illegible]ハやかるさとぞしられしこの
[illegible]らんこゝろや我[illegible]なる中に
おほ[illegible]の[illegible]思ひあるをも忘らぬ[illegible]に
よ[illegible]はますてあるまし[illegible]を

すゞ〳〵し　まゝや鎌山の夕かけら月
乃霞擁の柳花乃曲　〽言かきりもて羅
しとて　又元かきし〽さる耀そ
よや霞雲羅良比丹そよやけいやうう
ぬ乃舞そろふかぬ身披うれ〽何事も。
夢海かろしの戯蛍　あそれ胡蝶の
まひなすらん　支色去雲との葉まよ

思へも川も更生乃媛と志らす。来舞系
〽紫流情更ふ堂花乃果も尽し
郷るふ二十又まのうらの川くる生君縁
情乃理りふゆれも　先毛止の又衰
よ里酒係の四羅乃種くふかふ羅乃子
年経ふ蛮ぬ〽説玄あふ堂えれさうひ
数き乃中れなまききとこゝや　鏡色葉

年八上ル宮の法化よるか醍醐乃ちゝおし
あまりてかりぬ人堂ゟ出れきて楊家の
源氏に倒し遊ばいまうこ去る人ゟ
深し御恋き逢ゟしめされてゐるきほゟ
し氏宮に定めをさたまひ嬉花園
のかくらひも縁つきぬ道ハいろうゝ女氏
論に唯ひとりかへり来りてまとしたの

其も如き男の縁乃邑氏にあひ
こるりがきたりにかう連うきまうし去
其そのもとの御後ハ悦あ家喜文月の
七月乃来たとかも勢し春秋乃絵葉
色理乃去のまも植ゑまする秋晩のきて
此一乗乃勢ゑてうし名こそ道に習ひ
なるしやや年月かわらく祝ある

世中におはらぬ列のあかりまや八千代を人
おいそひてましらしそれぞそものれ
ぬ気ん空離そとみ時ハ遙ら足加陸
あかりれ那衣の出拜うあり曲陽にそ
久もむし女子の紬らかま適てわ
去らしやうろ志飼しやあひしき
むらしの拍かくらく流くさへ曰日

とうまおのおろし七かんさし投
なまりそひ海よてはうハ性そ執伎八
那みの久へまりれはまは法まそもく去
みはさ怪世あひらん事を喜遊の浄律る
うき世あれたさひやむしずゝ鳥
まくれのとう世乃うて可かま流てそ
そやうまつ里乃為

定家 作リ物 出して 脇三人 角帽子 水衣 腰帯 珠数 扇

ワキ次第
山より出る北時雨く ゆくゑや定めなかるらめ
ワキ詞
なかるらん 是ハ北国方より出る僧にて
候我未都を見す候ほとに此度思立都へ
上り候 冬立や旅乃衣のあさまたき
き〱 雲も行かふ遠近乃山また
山をも越色つく紅葉を踏ゐるあすめまて

花の都に花を尋ぬるなり　詞　抑是ハ
殊に花ハ咲や上京とりや中にも都に
一見せばやと思ひ候　面白や比ハ弥生月
十日あまりの事なれバ桜も色を揃て枝に
のこる紅葉乃名に重き色の青横まで色
都乃にしき一入に花紫もなかりけり
冬の夜の時雨の亭まで花の盛を

里に立寄り花を見ばやと思ひ候
小面　唐織　して　鬘帯　扇
してへ　なふ〳〵そこなる人ハ何とて
立より給ふぞ　わきへ　さん候唯今の花の色に
立寄て候　さて此所をハいかなる所と申
候ぞ　してへ　花を時雨の亭とてよしある所
なり　夏をも色あるしやうして　立より
給ふなどといへハ如何やうに申にハ　わきへ　実と花

る故ハもとこれハ時節の事にかゝはり
折からはじめしろふけちく花ハいろな高
人乃立もとり世話へ面来まて似そ見
八藤原の定家の流ハさて世も世へ面来
也師乃内とハやかゝんもとく時節乃
表面連ハとて此事もたてもさ筆く
奇もき色祢しき世話ひしと面り古跡と

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ひハ折からとこ以花連緑の法もとも古き詞
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ひて彼法筆揃もともおもふらひあきと、
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
まくめ筆ゝもん書ためまあまあもへ
ーーーー
やかり　扱ハ藤原の流き家の以乃立
もと世話へ面来りやさて　時節をも
とゝむる当の奇もいま乃去のまやや
らむ　〳〵やい川連とこ色定め面き時節

味のさしくる事ハわきてそれとハやかさ
しき身なりし時節をさきだて志をもしらぬをも
川なりのなき世なりけり雪月花、
たゞ頼みとする時節をあだにむなしう過き
に私の家もてどかゝる事これハ公の御寺
ちやゝへき　年にあたれバ君の
むなしうも時節ハ移りゆくすき世に

の詠詩なかりし人ハあさなる事をし
避ぬハしもかゝる世に他生の縁ハ
持もたね見そ一樹の陰のやどり
一河のなかれ汲ミて之人をも志まをも頼
かゝに　今様も富ハむかしの志をれもて
くらさに戸ヶ集人の志をもとせるも
夏の世の暑さをめさやさたの月の

定家かつらとハいかなる謂そ候
こた　式子内親王はしめハ賀茂乃斎院の
宮に備らせ給ひ程なくおりゐさせ
給ひしに定家卿ハ忍ひ々の御契り
浅からす其後式子内親王程なく空
しくなり給ひしに定家乃執心かつら
となりて御墓にはひまとひて、

まのるしゝ　雛やら給ふ斎乃宮
恋せし御禊よゝ斎ひ給ひし神かくらり
気ゝせきうなむ　同上　長主ぬ袖をとつし
へ乃ぞの奥九男ふ山のひて忍ふ乃
遂九露乃世絶らよりうるさ　同上　今る
玉乃をよ絶なハたえね存へハ忍ふ
ことのよわりもそするの枕乃露す

さ徳より出給しぬらぞ又ちまく
の中とありて萬物をおもはくさうあ
し徒乃くそぞそしてあき
を善邪をうまれふ拆果く世くふあ
あし山あぬ乃神の徳乃身のむかし
うさ悪もしと次様をし姿義乃うさ
のあふし色うありけりふ男ありき色

神やうけまもありふりん人の姿り
のゑふ出けるそかあしきつもとされ
さあうし世乃あさあるゆ乃名はされ
でよそのゆえ八大者のうれそあし
き月れ光の雲乃ゑひち給そてし
女の姿ぞめえぬくそ中まりき也
下
菜けまや乃ありくらもちふともあ

ちんたやあさき　同上　あらしきの峰の
雲と添しいんしまくさへいかの松風
乃空高かつと月ハあかりてけ浦はふ
月川とあくげる雲もやらて薄雲の
名こそれまと雲とも乃嵐も止も
松も露霧ふ清く露家桃と明き
夏座ぶかりふしもと夜かつふく

なると移あく雲もとりあやしき谷
浦月ミ移やら嘸雲や雨とくとなき月
の波ハあきちふの露ふ移けし名は
かりハ浦つまくと移よしそあさき　同上　よ
や露雨露ふ乃志のふさと名あはかよふ
名ともと　今ハつまし　同上　はうへを我
上式子内親王花ます君と我

海士の汲めハけふりふれしんふのうらかさ
ちらしそれとも見えぬ霞かゝり
うき捨もいへといふかとも見えて糸の露
く
夕も色ある月かけのく松風
あけて抱きとらん階乃浮る露れ身
とも念ひの珠れかきとく小夜嵐も
海士となる身く

いせ女 長絹
大口 扇 一声
菱かとくよ

宮乃うつれしうろの月かもたゝ露
荒ちハ若ハ松風涙月に汲とろ
り翠情有国に海ろうまあく
く哀のまし情乃すゑ哀も松かさ色
ちらしくふあしたの空夕れ雨也
同上
あるをしとも乃身も哀もうつてもま
かなしもふよしもの世とあらて給

さ消しず泥中の葉乃けざるハ蓮の
宿なりて それハ清き實なかりけ
これなんへや御傳 あらいさりしの
法の櫻やなあらいさり 唐く佛平等
説法一味雨露衆生性不変不同 説法
をよ身ハあさ浪乃立居にぬさ深き
てもらうしとけ実なかりふ身をと

比らきつくかうなりし傳なきふ
ちしれや 唯上傳補しハ菜草喩
なよなふ 中くるまやにか曲不を
なく草木もあきれハ桃んの花かくを
げそ都迄て終花なを終ふへし あら
さ我や当ふもく 花そ雨なる法のこ
ち待 あまくもさ家れかくしさら番て

〽ふる川のへく〽ふる川とおもき一味の法
の教乃まことをきらかひて当来雲
ちか遣皆ぬ弘乃きこえぬ道は実相から
らもかくもかへくとちらけ敷られ
分よ結くと是弱車の火宅をも出而
ゑかさらよし鉢思ふ哀ら八あまし
雲井此岩乃雅声をとふふかくをなる

香箱乃まきく夜〽たゞむ哀まひれ
まさ様やかる錦〽おもかまひのあ理
さま屋ゐおもかやかとそゆ乃かな様
屋ゐ〽かとまきし別八月のかすみを
〽鶯のまかもちふ植えまあきを〽むらふ
かく浅茅露と清てもつきやつき
乃紫の菊浅代錦もかき恥かしやよ

しなやよ家乃繁昌の是も衰へけるぞかし
どあまつる宴にぞ家ハ昔乃栄花の跡
乃あとゝてもひまもなく宴家に川ら
ちひまらかて宿宴家乃川ら忘ちる
よゝ
あくをかゝらハら川よき遠てう移り行

杜若

脇 僧一人 角帽子 水衣 扇持 [illegible]

呂河

是ハ都方より出たる僧にて候我未
だ東国を見ず候程に唯今思ひ立東国修行
と心ざし候
教へくれつゝ抱く宿なし
あまたに宿ハ変れども旅寝の衣の袖
すぎ来て河のよ浦に着くあ[illegible]
猶急ぎ候程に是ハはや三河の国に着きて候又是なる

沢辺の杜若の今を盛りと見えて候立
寄眺めはやと思ひ候　実や光陰留らす
春も過き夏も来て草木心なしと
は申せとも時を忘れぬ花の色かほよ花
とも申やらんあら美しの杜若やな

小面　唐織下ニ腰巻

シテ　なふ/\旅人何とて其沢に
はやすらひ給ふそ　ワキ　さん候是は見事なる杜若
に眺め入て候さて是はいつくにて候そ　シテ　是こそ三河の
国八橋の杜若ハ古歌にも読まれたる名所なれ
は名におふ花の名所とて色も一しほ
なへての花のゆかりとも思ひなそらへ給ハて
とりわき眺め給へかし
あら心なの旅人やな
ワキ　実に/\八橋の杜
若ハ古歌にも読まれたるとうけ給り及ひ候

二

いつれの哥人の詠のもや覧承度こそは
シテ是ハ在原業平乃哥にあり伊勢物
語にいはく三河の国八橋と云所にいたりぬ
爰を八橋とハ水行川乃蜘手なれハ橋を
わしをや渡らせるなり其沢に杜若の
いと面白く咲乱たるに或人杜若といふ五文
字を句のかみにすゑて旅の心をよめと

いひけれハ唐衣きつゝなれにしつましあれハ
はる〲きぬる旅をしそ思ふと在原業
業平乃此杜若を詠し哥也　わきあら面
白屋さて此東なんまての面影をきくも
業平ハ身を要なきものに思ひなして　シテ東都さ住
終に八橋乃こゝにきたりしも人の思ひ
うきさすらひ乃く色名にかなく　わき面白き所

おもはるゝ道ともしらで来りつゝ　して　思

ひ渡りし八橋の　わき下　三河の沢の杜若

はるばる来ぬる旅をしぞ　わき　思ひの色を世に残す

みえて　して　其はまた業平なるまゝと

形見乃花を　して　今宵に　わき　業平の形見

こそ杜若　わき　深き道の歌のあはれも

語りし人も八橋乃蜘蛛手に物を思ふかな

今とても旅人に昔をかたる今日の暮

やがて馴れ行く　して　わらはが庵は

見苦しく一夜を明かし給へ　わき　心得て候

し　初冠　長絹キル扇　して　なうなう此冠唐衣御覧候へ

わき　不思議やなあやしき賤の屋の内より

光りかゞやくきぬを着透額乃冠を着

しかも是を見よと承るは何といひける

申候へ シテ 是こそ歌によまれたる
唐衣たかきこの后の御衣にて候へ
又此冠ハ業平の豊の明の五節のま
ひの冠なれハ形見の冠唐衣身にそ
へ持て候ふなり ワキ 冠唐衣ハ
先ゞおきぬさて〳〵御身ハいかなる人そ
シテ まことハ我ハ杜若の精なり

植置し昔の宿の杜若と詠しも女
の杜若に成し謂の物語又業平ハ極
楽の歌舞の菩薩の化現なれハよみ
おく哥の詞もみな法身説法の妙文なれハ
草木まても露の恵の仏果の縁
をとふらふなり ワキ 是ハふしきの御事かな
正しき非情の草木に詞をかハす

法の声仏事をなすや業平も着
ありし世の舞の姿是ぞ則歌舞菩薩の
薩乃かりに衆生と業平の本地
寂光の都を出て あまねく済度
利生の為とよ あまくさぬる唐衣
三河の屋葉をりをりへ 別れまて
法のうしみの唐衣 神代の文字にのへ

さゝや 抑此物語はいかなる人の何事
によりて思ひの露の信夫山しのひて
通ふ道芝のはしめもなく終もなし
昔男の初冠して奈良の京春日
の里にしるよしして狩にいきしに
仁明天皇の御宇かとよいともかしこき勅
をうけて大内山の春霞立や弥生

はじめ給ふ春日の祭は勅使として
すきひたひの冠にかざさば藤花
恵の影ぞゆへ殿上かくの元服は
来当時の例帰るたびに初冠せん
やどりや継道とも世中のならひぞへ
度は寝ふ家理若まとなりぬる身
乃掬く恵須取もゝて東の方に

路雲は伊勢や尾張の海つらに立浪を
見ていとゞしく過ぎにし方の恋しきに
うらやましくも帰る浪かなと打眺めゆ
きは信濃なる浅間の嶽かまちやくゆり
煙の夕けしき泊くちそ信濃なる
浅間の嶽に立煙遠近人の見やは咎
めぬとはすさび打ちかへて旅衣三河の国に

美しく家そ所にあるハ橋の流ふ
白梅枝ちらんゆらゆらつゆし
あ家屋とこひらひる舞人柳は指給
雪思ひかけさ事明かし立わさは八橋
やミ河乃水代そ三井あく鐘りしく
名殘くり名をとりへ歩をとつく人まつせ
言のやミむ篇ましえ光を那まかく我輩の

雲の上まて越く面くハ秋風ふくとからに
那ま廊生湖波の戦ぞとハ去るやいなや
よの人乃曉きふゆらぬるゆれ光あ
まの孫き月やあゝぬまて屋まるゝぬ
まの呑ひ谷河ハそうのあふりて和光まぬ
の身とよるまり温湯の舞といふまじしと
唯業卒代はつとそりし積タ尸指給

宇ゝかまる世路ふ百様人絡ゝ至ゑる座
夜ハ月く庭まひ歩も花添らん 花ゐふ
蝶ハ舞ふ縁ゝ乎も雨露 柳上し花ゐふ
行くゐる金 桂垂し蓍草岩乃枝
菊の蕾ゑかゝゑ蓍於ゐ花しく
色ゑかりしそ 蓍わとの花を見し
花橘の句ひうつるあやめの如くれ 色ハ

草を摘 紐ときや和らり 桔梗花あや
児横小帰ハ 蝶の如く夜の 袖白妙
此卯の花の香乃 移を志らくと鳴る東雲
のあさ露乃 桔梗此花をさらけん
色ゝ寄くすゝや 今こそ葉末あを
まゝやと思そ 草木同色成仏
志ハ涼しく思そゝ色らん

誓願寺

脇僧三人　角帽子　水衣　腰帯　扇持　珠数

ワキ次第上

おし廻の道も一筋の〳〵法の流を四方に廣めむ

詞　是ハ念佛の行者一遍と申

聖にて候我三熊野證誠殿に參籠申

て人ハ非識ま四句の文をさづけて給ハ

國中にひろめん爲唯今都へ上り候さや淨語

形も形ハ色も三界ハ心ひとつにハふ走物

旅衣紀乃関守か手向る出入月数かさ
なりて時もこそあれ春の都に
着にけり　急の程に都に着て候
是は我及へ不得世の札をひろめ申すに
て候　面（小面　泥眼　着唐織　珠数）　わきこころ上
是に雑や実仏法の力
其業識群集は色々に袖を連ね路
を継て知もしらぬも念仏三

昧の道場に出入人　老若貴賤都鄙
名にしおふ誓願寺の夜は更に身に
墨染の　夕も罪障の法
そ
罪障の鐘　わき　離苦の人畜
わき　夢の迷と　わき　形の花風
かねまつも　同上　弥陀おも
心を猶も一声の（中）内に唱へ蓮華の
満りに志を何も数の内至へき

有難き御誓ひ今に始めぬ誓ひのあらた。

更に上人へ此御札を申し給はりたく

シテ 有難や此御札を見奉れは南無阿弥陀仏六十

万人決定往生と書かれたり扨は六十

万人より外は往生に洩るへきか

ワキ 面白く色々御不審尤也札は三熊野

証誠殿より直に神勅示四句の文を給て

此頌の上の字をとりて證文乃為に書（六字のめうかうを）

付より只南無阿弥陀仏決定往生と此文

まことを此御教のこゝろ也 シテ 扨其四句の文ハいかに

なる事やらん有難く思ひ我に教

し給へ ワキ いてゝ語りてきかせ申さん。

六字名号一遍法。十界依正一遍体。万行離

念一遍証。人中上々妙好華。此四句乃文の

上の字あるは常平万人に念を書くあるなり
有難き所とも不思議の所なりよと照
念仏衆生をしへ　光明遍照十方世界
おしへ　念仏のものをきらはずなりなど　摂取不捨
十方人を救もとめて定めし給ふて
うれしや落させ此御札常平万人念殺
を八打捨て　波定往生南無阿弥陀仏と

只一筋に念をあらはも　遠世ある別の定
す所　往生用意や何事も皆ら捨て
南無阿弥陀仏と　と申す道八佛覚
我も病のまるりく　南無阿弥陀仏の声
なり重誠に深く廻向発願の彼岸乃声再
にそあく有難やまなとに頼あるさよし人
十念を一念救はせ給ひまくもまいそうなも

むしろ八功そなへ難き　青獅子夕陽雲
にほふ宝池の蓮の
念佛よろこぶ念仏ばかりやはらかん
なほ更に夜念佛独衣声つまき
まさんと讃すみし念仏さしや　有難や文
浄乃雲とりて浄土だてはけらくて仏世から
三世安楽の国まれや生れ接らもそうき

文　同上　宝安楽の国なれや安く生る蓮
紫乃雲の夜もそままなるや　有難や
はまうやかまそおしめて浄土乃要法
文為万すのりき　同上　雲もそゝの
義八我名利不可量罪　又八経の後
手世も　同上　浄土一義也　仏ある　有難
念あつまかみや八万諸聖教皆もあらき

仏所なるへし此御所なるを上人へも住持御座下し
御撰ありしを御佛と上人を一緒に御座を
と有り（わき）いかに上人にも申ささ事候
（して）事有りし候此撰ある所と打ちて額を寺に
六字の名号には如何し人（わき）先其の事よ
らぬ事とも承りの所に書きの撰ある
と存じ候額をかのせ六字の名号にはなき人

我等は上は此法師の身なりとも御
こしょうねか候て（して）如何にも候
此は書きて候額を（わき）持ち申しの事の御
さては御身を候人そ（して）妻の額
よその所に額あれ又扁額人
（わき）扨や其あの又持ちは御しの額を
（して）我等は我に額をも

三八有義志頭のそ我常宿へ持ふ位
遍のあまをすくはん為に法の舟
程しむまふいはつの舟つくりて悦ぶ
なから心空ふ飛いしやうし捨身中ころも
上人よわり仏をたな受記の利衆生
我そとそ石瑠の底乃出光と共にかゝる
くさりにし
かりし
わざ
此物尊さは此音ふ世あま

より撞鐘ともかゝる鐘との音とこゝろ
名号より己は依りし共まいら
しくやも果香薫ろうく越ねらく
なまこ声ある事の鐘をとのあいたまま
蓋ふつきくも縁なひ心をまちのを
清き鐘打ならし日暮つり
佛法僧世事
あらまし雅の鐘
南無阿弥陀
赤面長絹
冬大口腰帯扇

此名号を聞し悪世の衆生海彼の岸にすゝめ
佛の御すかたを現じつゝ仏前にあらはれて
難行よ我等かなしき苦の世の霊界
成すといひけれ身の仏果をとぐるや極楽の縁
難 此業薩をとめるより二十五の菩
薩聖衆の御法は仏の雲たなびく名目
新しく当の灯かぶらて御有り

宴も極楽世界に生れ来るもの難きよ
称名も稀なる上にも其家の尊天の
此御影御菩薩の大菩薩
来目の神此御流と来るや神といへ
佛ごろも唯光名残に此有てそなり
能くも和光喜び新たに諸あらはれて
衆生済度此御菩薩なり されは毎日一度は

同上
西方浄土に往生して來迎引接
まけり無量壽佛蓮臺に迎て浄土へ
孤獨のものなきや來迎し給ふ月の
前にかゝや普賢菩薩の山のほとりに清浄一佛
西方弥陀勝迎來菩薩観音勢至の來て以
娑婆示現観世音三世利益同一躰あまねく
たのや我らがための出離なり　若我

御佛の光をせよ濁世の人　同上　日月の光に照らさる
きれ清浄の功徳の名号稱して悪道を逃
にごりなりて衆生を救むる西の台な
五逆十悪善邪見の者を尊色々をも迎
五劫思惟の西方を極楽浄土の迎かる
唯心の浄土と八代に楽形もなきむかひ
頼み念仏菩薩のさなくに仏事をなする

かくな年独り紛の此程を弥陀の名をぞ名
満つ法の場人のりの場へ法の事ハ人の書
色なるならぬ勝負手に唐に寄くば書
楽の声呈書して物みの霊の神
振と今まで返すも色きを上人の利益の萬
藤原の行成卿に書ふうて誓願寺の額を
みな一同に乱れ給ふハあらたなりける奇瑞かな

二人静

脇一人 風折 素袍衣 大口 腰帯 扇

ワキ詞
是ハ和州三吉野勝手の明神に仕へ申者に
て候扨も当社ニハ年中正月七日に若菜を神供に
備へ候当日ハ菜摘の女をあつらへて川辺に上ゲ
より女を出しあつめ候急ぎ何とか若菜
を摘せ申さばやと存候
まと申候 女一セイ 見渡せば松の葉白き吉野山

一ろ一二二二二ト一二二二一一一二二一一二二二二
菊飛ゝ山いく夜積もりし雪ならん 廿上 一重から
一二二二二一一一二二二二一一一二二二
来立(?)のあしたの原川しらみのうち
一二二二二一一一二ト二一一二二二二
拵すむ杉も若葉は紫みへて緑もみどりに
一二二二二一一一二二二一二二上
夏衾酒名よし 知らぬ若葉の日 廿ノ本
一二二二二一一一二二二一 打
此め来南渡りそ色く 杉清からに八式雅
一一二二二一一二二下二二二
色の雪乃下なるわが面ざし今は昔 かはらで 播まし や
二二一一二二二二二二二二一二下
来室といふまうかのうち吉野の山も霞みて

二二一二一一二二二二ト一二二二
声々香の清し紅ようるも紅も清し紅こそ
二二ー
色と紅も 大丈夫 鬼帝名織錦 して なまめく あれ葉播
今日ハ文字の作 運 二輪この月ハ仕事
知そいそ して 君よし雅へ調べあらぬ給
やらん一日縁らひて我らもえてたいらへ
と相下行き 運 花まさひもようみ書きを
御所稲ゝの山 雨下ハ文字文ハ安置の仕事

（シテ）や

也せ世かくおかんちまハ誹もや息き

我名ハ亦けしまてたか此式とをおおよち照らう

まか録前の人にに要居て古ひ給へ為とも

数多人ハあらハ金時まハおニとて信き我名を

名乗ふ事へし播て続きお居あ連と夕

風渡のふあき雪香の行水蓋かし筆乃江か

文字をも捨ふ共ふおりく

（ワキ）へ若業平をも

播て只と何りそれ

（ワキ）へとふく隠連とや然

つるふ仍て未ふ何事そも

（シテ）へさん仍

業平をつき何りハ形ふあの女笠河乃

隠連て去様まさ渦し去女性の江の

紀の業平ハ在原中将の人へ白経ふく我語も

て毎ハ語へとや後ひつる

（ワキ）へ常しきれ筆を

やめの形こ去様れるまあらハ何をて甚哀の

名をハ何とか申候そ　つれ　童も不審なくにさふらひ
名をとひてたべさハや我名をなのるべし先
此事をよく社家にて申すべし社家の人々
に委くて申ひ給へとの事にて一日経書ひ
にまことしからぬとおもひて御疑ひあらば
猶あらハその時ハ我つきて委しく名のらせてく
重くやしくかひとなく数をめしかはしさんや　三

よしよそめにハ吉野の花も雲
上 見わたせば世をもちらさぬ憂き雲と見る桜
吉野に帰る者の言伝の数々や
わき　言語道断の事ども也める女に覚え
狂く様く世にハかやうの事もあらんや
明る者に付そひ申すそ名をなのり候へ
かならず一日経の事申付候ふさ事々　二

（シテ）継信忠信とてわらハか子にて候ひし
継信ハ判官殿此御内乃者なれは　（ワキ）判官殿の
御内乃人としてハなと忘しそもさらさる若者達
為其名信あまく御しまする　（ツレ）あふさ君
信ハ判官殿此路矢面に立て腹巻きりて能登の答
に能登殿の矢にあたりし大剛の者なかりしそ
誠有かたき事にて候　（ワキ）さてまた八夜河の忠信

まて御供申さん　十良権守　（ツレ）為落ち
判官殿此御花難々の人々かたさはらの腹
まさ里鶴の子乃いのちを為の名さ
連とも名れまいら花被参る我か身
身のかため山まて八御供申家給て採ら連来る
せくさ給は恨み涙乃袖　つゝみかねて
我もせめて八難なれ申さん秘か忌　（ワキ）思との

網の手にかゝりてハ擲ハ静かなるに
面ひるかへる静かにかく海しほときハ鎌さゝ出て
此世ハ猟の庭とこそハ一日経れ其中ハ猟の庭
つよ
鎌のほとり鎌の夜漁夜ともに猟に出る
の家に生れけ物の為に餌の差の鉤に
あかりかゝりける我にハ殺へ わき 拍
鎌の夜猟夜ハ何ゆへぞ つよ 猟ハ禁断也

世を秋乃野の殺生 わき 見る時しさ
の中まで色を家の篝を見る所見ましハ
まれ鎌の夜殺生あらそひてさらく
まひとほまへハ心へ つよ 船りや眉足立ぬ
心そくさもありつるひてハ わき 時も
其よりも閨のまひ 同上 と猟野の門に
名残 工ホン 大口 腰帯 扇 長絹 して上 夜業ハ女とのなよ

同上 河浪ちりきし山陰乃香をたへり交鈑

寿命さてを利友を色浪は唯せをも

同下 流付まもりふしきえし々小舟は元紫

ちミ南へ都濤かりまし渡ら今せりる

海浪へり浪を世さを雅風吹くまを地

かえし事天象をさへ八 料朝かし

同下 出 料なりまりるを月もとらりし家

曲下 むらまむ也 去程に浮身をなしにまかせ

さに勇とありて此山小かに入給ふ比を

茂有をりよし時乃御は高く瀬を休

色世景のまる浦衆風に秋をせぬ夏

ともらもちる浪にふ一葉一葉まのあら

水る浮世にて又比ひたま落てゆく 昔

同上 浮世の栄此夫あり 大友の皇子のみかれ

それまでは波山に花にまがふ雪の本法
ちぎりしはくりの桜木の家の神の宮寂
河の瀬我こそはらはらと涙も流
朝まだき色なく菩提の教も来法の花
乃雪夜もたまらぬ花く山吹さつき
し文書のよ此月は知知ふく桜花
乃山ありと知れは行独は唐のさとも

くるしみを見はてす桜月よゆる
花と見のうへに白雪の花と残ては闇く惜
むかしの事は昔の事を夢と静めてさはりきこえ若は
の山風にちる花をも追ふて涙と流
をのみ吉野の奥深く山深くかをかをも
ひとつ涙うなかし桜花に世の間は錦の
よそならぬ花くとあはれしくは色とけぬ錦の

國學院大學
短大
受入
36. 3. 14

神ならでしるよしもなく菖蒲も此時なれや和哥の式

鎌倉の山家のしらべ春そとらへ

菖蒲もはなしかけり色あせぬ世の中に

くるしき色ある業は今も猶哀なり

身をうき流ぬれど世にも忘れぬ　武士の嵐を

小塩の習ひならでは曰く世は山桜

に終なきもの情を世の中の哀をいひ終へく

此本者下掛り新板改正
并衣裳付秘蜜之栢子有
章句写之令開板所也
正徳四甲午暦弥生吉日

新町通下長者町上ル町
谷口七左衛門
洛陽書林
摂津屋　七郎兵衛